学習項目としての読後一言コメントについての予備的考察

―初中級レベルの日本語学習者の多読後のコメントをデータとして―

俵　山　雄　司

要　旨

本稿は、日本語クラスの中で学習者が他者のパフォーマンスや作品に日本語でコメントをする際の、コメントの書き方自体を学習項目の一つに位置付けることを目指すものである。ここでは、初中級クラスの多読活動の過程でLMS上の掲示板に学習者が書き込んだ読後一言コメント125件（189文）をデータとして、その内容と表現を分析した。内容面から分類した結果、「事実」「意見」「感想」「複合」「働きかけ」「メモ」「感謝」の７種のカテゴリーが得られた。そのうえで、各カテゴリーを表現面から検討し、「事実」については、経験「～たことがある」と存在「～にも～がある」「～は～にもある」の文型提示と用法解説を行うことを提案した。また、「感想」では「～たい」と「～てみたい」のニュアンスの異なりへの言及、「働きかけ」では「～〈普通体〉か、知りたいです／知りたくなりました」の導入を提案した。

キーワード

学習項目、コメント、初中級レベル、多読、オンライン

１．はじめに

日本語クラスでは、他の学習者やそれ以外の他者のパフォーマンス（例えば、スピーチ･プレゼンテーション･劇など）や作品（例えば、作文･エッセイ・ブログなど）について、学習者が日本語でコメントをする場が設けられることがある。日本語クラスにおいてこのようなコメントをすること

は、仮想的なコミュニケーションとしてではなく、実際に存在する他の学習者や他者に伝えるために日本語を使用できる機会となる。そのため、このようなコメントをする活動は、現実のコミュニケーションの中で言語を実際に使用しながら学べるという点で、意味のあるものであると言える。

一方で、コメントをする場において、日本語学習者に対して、どのような内容のコメントを、どのような表現を用いて行うかの説明が明示的に行われることは少ない。わずかな例が提示されることはあるが、例の提示のみに終わり、どんな内容を、どんな表現を用いてコメントするかは学習者任せになっているのが現状だと考えられる。

この背景には、コメントを受ける側のパフォーマンス・作品の産出や理解が学習の中心に据えられ、コメントの書き方自体が学習項目として扱われることが少ないということがあるように感じられる。

本稿では、初中級レベルの日本語クラスで行った多読活動の後に、日本語学習者がLMS（Learning Management System）上の掲示板に書き込んだ読後一言コメントをデータとして、その内容と表現について分析を行う。そして、その結果から、初中級レベル（初級後半から中級前半にかけてのレベル）において、学習項目としてコメント自体を扱う際に役立つ知見を取り出すことを目的とする。

２．先行研究

日本語学習者のコメントの表現について扱った研究には、濱田（2017）がある。学部留学生対象の講義の終了時に提出されたコメントシート262件から抽出した語彙・文法に関する誤用832例を分析した結果、「語句の選択」「話し言葉」「助詞」「テンス･アスペクト」「複文」「文法形式」「活用」「語句の使用」「やりもらい」に関わる誤用が多かったと述べている。また、コメントの表現自体ではないが、多読後のフォーラム投稿を扱った研究に原田（2015）がある。これは、中上級日本語学習者を対象としたLMSを利用した多読と多読後のフォーラム投稿によるディスカッションの観察から、学習者の相互作業によって社会構成主義の学習理論でいう「意味の構

築」の兆しがうかがわれたと報告している。

一方、日本語学習者ではなく、日本語母語話者によるコメントを分析した研究に阿久津（2013）がある。ここでは、テレビのニュース番組のインタビューにおけるコメントを資料としており、コメント文中にある「感想」を抽出し、分析している。その結果として、品詞としては形容詞・形容動詞が多い点、文の成分としては述語が多い点、話し手が「経験（感情・感覚）の主体」として主語になる文が多い点などを指摘している。

上記の濱田（2017）と原田（2013）は、分析対象となった学習者のレベルについては、前者が学部留学生、後者が留学生別科における JLPT の N１対策授業の受講者という記述があり、おそらく JLPT でＮ２・Ｎ１レベルの学習者であったと推測される。このレベルであれば、文型・表現の知識も豊富であるが、本稿で分析対象とした初級後半から中級前半、いわゆる「初中級」レベルの学習者は、初級の文型・表現を知識として知ってはいるが、それを場面や媒体に合わせて使いこなせる段階には到達できていないものと思われる。そのため、読後一言コメントを書く際の文型や表現の例を示すことは、活発な産出を促すうえで、意味のあることだと思われる。本稿では、このような前提のもと、データの分析を進めていく。

３．データと分析方法

３．１　分析対象となるデータ

本稿で分析対象とするのは、初中級レベルの総合クラスで行われた多読活動で得られた多読後の一言コメント189文である。

まず、クラスと多読活動[1]について説明しておく。このクラスは、2020年秋学期に名古屋大学の「全学向け日本語プログラム」においてオンラインで開講されたものである。期間は14週間で、各週には90分の授業が週３回ある。このクラスを継続的に受講した者は16名（身分別：修士８、博士５、その他３）であった。多読活動は、12月中旬から１月中旬にかけて、週１回の会話パートを行った残りの時間で行った。１回目30分、２回目60分、３回目30分、４回目30分の計150分を費やした。

多読に用いた素材はすべてオンラインで提供されているもので、①「KCよむよむ」（A1・A2・A2/B１の26編）、②「読み物いっぱい」（Level１の41編）、③「多読　日本語学習読本」（レベル１の６編）であった。毎回、活動の前には、粟野･川本･松田編著（2012）を参考にして、読み方のルール４項目（下記）を提示し、説明した。

1．やさしいレベルから読む
2．できるだけ、辞書を引かないで読む
3．わからないところは飛ばして読む
4．進まなくなったら、他の本を読む

受講者には、本を１冊読んだ後に、大学のLMS上の掲示板にコメントを書くように促した。掲示板には書名ごとにスレッドを作成し、そこに読後の一言コメントを投稿してもらった。なお､読み方のルール説明の際に、コメントの例として､「ストーリーがおもしろい！」「絵がかわいい！」「私も行ってみたい｡」「よくわからなかった…」の４つを提示した。

分析のため、この掲示板に投稿された全コメントを抜き出したところ、125件が得られた。コメント執筆者は14名である。この125件を、さらに句点や改行を目印に一文と思われる単位に分割したところ、189の文となった。以降では、この文を単位として分析を進めていく。

3．2　分析方法

ここでは、読後の一言コメント189文について、主として内容面から分類し、その内容ごとに実際の例を見ていく。分類は、感想を述べる文を分析した阿久津（2013）を参考に、原則的に､「事実」「意見」「感想」の３つに分けた。阿久津（2013）は､「事実」と「意見」の区別について、木下（1994：37-40）に基づき、以下のように定義している。

事実：自然に起こる事象や自然法則；過去に起こった、または今起こりつつある、人間の関与する事件の記述で、しかるべきテストや調査によって真偽を客観的に判定できるもの

意見：事実に対比すべきものとしての〈考え〉

そのうえで、阿久津の分類では、（広義の）「意見」を、主張や判断といった（狭義の）「意見」と「感想」とに分けている。前者は、「希望（自身に対する希望、他人に対する希望）、義務、意思・推量・判断」などを含むとしている。後者は「主張や判断ではなく」「感じたこと（感情・感覚、評価など）だけを述べている」ものとしている。また、「意見」とするかどうかは、主に言語形式（表現）で判定するが、叙述・断定形が使用されている場合など、特定の言語形式が認められない場合は、意味を考えて分類したとある。

本稿では、概ね、阿久津の三分類を踏襲して、論を進めていく。ただ、阿久津が「意見」に分類しているもののうち、「希望（自身に対する希望、他人に対する希望）」（具体的な表現形式としては「〜たい」など）は、むしろ、上記の「感想」の特徴を備えているものと判断して、「感想」に分類した。

4．分析結果

分類の結果、事実62文、意見９文、感想104文、複合（３カテゴリーのうち２つが同時に一文中に現れた場合）５文、その他９文となった。さらに、「その他」に含まれるものを検討し、「働きかけ」「メモ」「感謝」の３つに分類した。

以下では、「事実」「意見」「感想」「複合」「その他」の順で見ていく。

4．1　事実

「事実」の中には、本の内容の一部（あるいは全部）を自分の言葉で表現しなおす「説明」（17例）、自分の知識の状態に変更が加えられたことに言及する「知識」（８例）、本の内容と関連づけて自身の経験や知識を披露する「関連」（37例）の３つの下位分類がある。

以下、順にそれぞれの例を示す。その際、文中に含まれる誤用はそのま

ま示す。また、その一文のみでは、表現意図がつかみづらい場合は、前あるいは後ろの文とともに示し、該当の文には下線を付して示す。

説明

（1）太郎はがいろいろな趣味があります。

（2）天王寺動物園にはいろいろな動物がいます。

（3）アインさんはSENSHU BOYZが大好きです。

（4）11月の特別な日について歴史です

（5）メアリーさんはさまざまな国からの友達がいます。

（6）ニュージーランドのクリスマスは夏ですね。

（7）パブロバは有名なニュージーランドのデザート、

（8）インドネシアの「おめでとう」の日は独立きねんびですね。

上記はいずれも本に書かれていることの一部（あるいは全部）を一文で伝えようとしたものである。

知識

（9）分からない新しい言葉がたくさんありました。

（10）新しい言葉がたくさんあります。

（11）気持や態度の言葉たくさん学びました。

（12）アルパカが葉を食べることが知らなかった.

（13）アルパカ牧場に一度行ったことがありました。<u>しかし、私はオレンジ色のアルパカについて聞いたことがありませんよ</u>。

「知識」には、（9）（10）のような「新しいことばの存在」、（11）のような「自身の学びの達成」、（12）（13）のような「新しい知識の獲得」などの表現のバリエーションが見られた。また、次の「関連」においても、関連付けの方法に複数のバリエーションが観察された。本の内容に関連づけて、①自身の経験を述べる場合、②自身の趣味・嗜好を述べる場合、

③母国にも同様の事物があることを述べる場合、④その他の４種である。

①自身の経験を述べる場合
（14）以前京都の清水寺に行ったことがあります.
（15）私は以前千葉県に住んだ時，まーざー牧場に行ったことがあります.

②自身の趣味・嗜好を述べる場合
（16）<u>私も好きなアイドルがいます</u>。<u>嵐というアイドルグループです</u>。
（17）<u>私は動物が好きです</u>。先週末息子といしょに東山動物園へ行きました。

③母国にも同様の事物があることを述べる場合
（18）中国ごでも、かぼちゃは“南瓜”で、南からきたメロンの意味です。
（19）中国にも「カウィ・バウィ・ボ（じゃんけん）」があります.
（20）似ているおとぎ話は私の国にもあります。

④その他
（21）最近，買い物にスマホを使うの日本人はどんどん増えった.（QRコードの話からの連想）
（22）カンボジアには、いろいろなばなながあります。（日本のバナナの話からの連想）

この「事実」のカテゴリーで使用されている文型で、ポイントになると思われるのが、「関連」の①「自身の経験を述べる場合」で使用されている「〜たことがある」と、③「母国にも同様の事物があることを述べる場合」で使用されている存在文「〜にも〜がある」「〜は〜にもある」である。

まず、「〜たことがある」であるが、以下の（23）のように文末が「〜たことがありまし<u>た</u>」のように過去形になっているものが複数見られた。

これらはある一人の学習者が産出したものであるが、同様の誤りは他の学習者においても十分に起こりうると思われる。

（23）私は金閣寺に行ったことがありました。

また、初級文法の解説書である庵・高梨・中西・山田（2000）では、「～たことがある」の使用制約として以下の２つを挙げているが、その違反により不自然になっていると思われる例も見られた。

①そのことが当たり前のことではないこと
②そのことが行われた時期が基準時とある程度隔たっていること
（p.48）

（24）小学生の時じゃんけんをよく遊んだことがあります.
（25）この秋、日本に月見がみたことがありました。

（24）は、「じゃんけんで遊ぶ」という行為が当たり前のことであること、（25）は、表現されている事態が「この秋」という比較的近い時期のものであることにより、文に不自然さが感じられる。この点は、授業でコメントを書く前に、学習者に伝えておいてよいことだと思われる。

次に、存在文「～にも～がある」「～は～にもある」であるが、下記のように「も」が抜けているケースがあった。

（26）あんちんというまったく同じ発音の言葉はモンゴル語にあります。

基本的な存在文の形である「～は～にある」に並立の「も」が付加されるということを、確認しておく必要があるだろう

4．2　意見

「意見」は、「事実」に対置されるもので、主張・判断などをあらわすものである。今回のデータでは9例が観察されたが、使用される表現には特に傾向は見られなかった。以下の例の後の丸括弧中には、主に文末表現から判断した文のはたらきを示す。

(27) 宿題をちゃんと書かないといけません。(当為)
(28) 子供に読ませたら勉強になれるでしょう。(推量)
(29) 毎日運動するのは健康です。(確言)
(30) 日本に来た外国の人はあまり名古屋に来ないよね（同意求め）
(31) 私は最近仮免許を取るため，平針に行って筆記試験を受けるつもりです．（意志）
(32) 子供の神様みたいですね。(比況)

4．3　感想

「感想」は数としては最も多く104例が観察された。阿久津（2013）と同様に、品詞では形容詞（イ形容詞）・形容動詞（ナ形容詞）にあたるものが多数を占めていた。具体的には、以下のようなものである。

イ形容詞：赤い、危ない、いい、忙しい、美しい、面白い、かわいい、白い、長い、懐かしい、優しい
ナ形容詞：簡単だ、かわいそうだ、きれいだ、残念だ、だめだ、変だ、便利だ

イ形容詞・ナ形容詞は、文の述語の位置のほか、名詞を修飾する位置に使用されている場合もある。また、「形容詞＋と思います」のような二重述語のような形もここに入れている。また、文の述語の位置の場合は、「面白かった」のような過去形を取ることもある。以下の例では、該当箇所に点線を引いて示す。

（33）太郎の夏休みはとてもおもしろいです。
（34）海南島はきれいです。
（35）ラーメン王子が食べられて残念です。
（36）司書は優しい人です
（37）面白い言葉！
（38）QR コードがとても便利だと思います。
（39）ストーリーがおもしろいけど、言葉が難しいと思います。
（40）面白かったです。

また、以下のような「希望（願望）」をあらわすものが16例観察された。

（41）私もきれいになりたいです
（42）山を登りたいです。
（43）きれいな海南へ観光に行きたいです
（44）毎日にこにこしたいです．
（45）オークランドに行ってみたいです。
（46）立ち食い蕎麦屋へ行ってみたいです
（47）ぜひ、天王寺動物園行ってみたいです。

表現としては「〜たい」「〜てみたい」の２つだが、「試しに一度」というニュアンスのものは、「たい」だとやや直接的で子供っぽく響くことがあるため、「てみたい」のほうが、より自然だと伝えてもよいと思われる(2)。
上記以外に、「感想」には以下のような文も見られた。

（49）２月３日の節分を楽しみにしています。
（50）勉強になりました

これらも「意見」に含まれる主張・判断のようなものではなく、やはりある種の感情を表明するものだと言える。

4．4　複合

「複合」の文は、5例見られた。これまで述べた複数の分類が、複文構造の中で、一文中に同居しているものである。これらの文の前半は、そのさらに1つ前の文の情報を前提としている記述が多く、以下の例でも、文脈として先行文を示している。以下の例では、文の後ろの丸括弧内に、文中に含まれるカテゴリーの名称を示している。

（51）私も好きなアイドルがいます。嵐というアイドルグループです。今は解散しましたので、ちょっと寂しいです。（事実＋感想）

（52）カンボジアには、いろいろなばななwhile があります。日本でバナナの木を見たことがありますが、なぜ日本はバナナを育てないのですか。（事実＋働きかけ）

（53）以前京都の清水寺に行ったことがあります．ただその時清水寺は一時的に修繕中，残念てした．（事実＋感想）

前半が「事実」の場合が多かったが、数が少ないので、これが一般的だとまでは断言できない。

4．5　その他

阿久津（2013）の三分類に当てはまらず、「複合」にも入らないものも11例観察された。それらを、内容的な面から「働きかけ」「メモ」「感謝」の3つに分類した。

「働きかけ」は阿久津の分類にはなかったもので、6例のみ観察された。誘いの形式をとるもの3例と、質問の形式をとるもの3例があった。

（54）ぜひ、関西国際センターの図書館に行きましょう。

（55）まもなく、クリスマスですね。家にクリスマスのきれいなかざりましょう。

（56）2番目に大きい動物園です。でも、日本にどな動物園は1番目大

きいですか。

（57）おむすびころりんはどの味ですか。

誘い３つはすべて同じ学習者、質問３つのうち２つは同じ学習者（誘いを産出した学習者とは別の者）が産出したもので、少数の学習者が集中して使用していた形式だと言える。質問については、意味はもちろん伝わるが、投げかけのみで終わることが「コメント」と言えるかどうかは判断に迷う点である。例えば、上記の２つの質問であれば、より「コメント」らしい文型として「～〈普通体〉か、知りたいです／知りたくなりました」など、述語「知りたい」で質問を包みこむ形を導入してもよいと思われる。

次に、「メモ」について見る。「メモ」は、本の中の表現をそのまま抜き出して、覚え書き的に記したものである。同じ学習者から２例の産出が見られた。前者は、１つの文をそのまま抜き出したもので、その後に、その文に対する言語的な評価が続いている。後者は、キーワードを複数書き留めてあり、語釈や英語の翻訳が添えてある。

（58）アルパカ牧場は、私のうちの近くで、大きいです　←　なんか変な感じ　私のうちの近くで大きなアルパカ牧場があります？

（59）こぞう 小僧　逃(に)げました　やまんば 山姥　追(お)いかけます　おふだ = 守(お)り札(さつ)　投(な)げる throw　進(すす)めます　隠(かく)れる　おしょうさん　わざくらべ compare　まめつぶ 豆粒

最後の「感謝」は、複数の文を連ねた後に、コメントを締めくくるように、添えられているものであった。

（60）私は動物が好きです。先週末息子といしょに東山動物園へ行きました。とても楽しかったです。今アルパカについてもっとしらべたいです。ありがとうございます。

「その他」に含まれる３つのうち、「メモ」は本の内容ではなく、そこで用いられている言語自体に焦点が当たっており、言語学習の過程で産出されたコメントならではのものである。

５．おわりに

本稿では初中級レベルの日本語クラスで行った多読活動の過程で産出された読後の一言コメントの内容と表現について分析を行った。その結果、コメントは「事実」「意見」「感想」「複合」「働きかけ」「メモ」「感謝」の７種のカテゴリーに分けられた。内訳は、「感想」が５割から６割、「事実」が約３割で、これらで全体の９割近くを占めていた。加えて、「事実」の中には、「説明」「知識」「関連」といった多様な下位分類があることを指摘した。

また、カテゴリー別に分析した結果から、「事実」では、経験「〜たことがある」と存在「〜にも〜がある」「〜は〜にもある」について文型提示と用法解説を行うことを提案した。また、「感想」では「〜たい」と「〜てみたい」のニュアンスの異なりへの言及、「働きかけ」では、通常の質問形式から一歩進んだ、「〜〈普通体〉か、知りたいです／知りたくなりました」の導入を提案した。

もちろん、本稿で示した結果は、読後一言コメント全体に通じるものとは言えない。しかし、これまで産出や理解が優先され、明示的に学習項目として扱われることが少なかった、読後一言コメントのシラバスを作成するうえでの基礎資料となりうるものは提示できたと考える。

また、今回分析対象とした読後一言コメントが、初中級レベルの学習者が産出したものであることを考えると、今回、上記で提示した文型は、初級レベルで学習したものの、その用法が十分に理解されていなかったり、正確な使用が難しいものであったりする可能性がある。この点を踏まえて、指導の方法を検討することで、中級レベルへのスムースな移行が達成できることも予想される。

今後は、異なる授業(活動)形態や、異なるレベルの学習者におけるデー

タを検討することで、読後一言コメントの全容を明らかにすることが期待されよう。

注

（1）多読活動の詳細については、俵山（2022）で述べている。
（2）筆者の個人的な感覚として、初中級レベルでは「〜てみたい」の自発的な産出は多くない。今回「〜てみたい」の形が一定数観察されたのは、活動の前に提示したコメントの例にある「私も行ってみたい」が影響した可能性がある。

参考文献

阿久津智（2013）「感想を述べる表現」『立教大学日本語研究』20、21-31
庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
木下是雄（1994）『レポートの組み立て方』筑摩書房
粟野真紀子・川本かず子・松田緑編著（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク
俵山雄司（2022）「オンラインの特性を生かした多読活動」『日本語教育方法研究会誌』28-2、138-139
濱田美和（2017）「学部留学生がコメントシートを作成する際の日本語の語彙・文法上の困難点」『富山大学国際交流センター紀要』4、13-20
原田照子（2015）「LMS（Moodle）を利用した多読の可能性—多読後のフォーラム投稿を中心に—」『桜美林言語教育論叢』11、109-125